

■ フォトエッセイ ■

変貌する メコン経済圏



貧困削減が進むカンボジア・プノンペン

上：2004年9月2日

左：2013年11月6日



写真・文 石田 正美
Masami Ishida

メコン川が流れる中国・雲南省、ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムから成る大メコン圏の研究に携わるようになって、一〇年あまりが過ぎた。二〇〇四年に各国を回ったとき、カンボジアとラオスは筆者にとり初めての国であり、中国・雲南省の昆明やベトナムのホーチミン市も初めての地であった。初めて買ったデジタルカメラ越しにみる風景は、目新しいもののばかりで約四〇〇枚もの写真を撮った。撮りたいと思った写真は、主観になるが、良い写真になった。その後二〇〇九年からは約四年半あまり、バンコクを拠点にこの地域をみる機会に恵まれたが、同じ土地を再び訪れると、目新しさを失った。シャッターを切る回数も減り、感動なき故に写真の出来も今ひとつとなっていた。ところが、筆者の膝元のバンコクで、相次ぐ高層ビルの建設など目まぐるしい変化を経験し、そうした変化を写真に収めなかったことに気付き、後悔した。そこで、帰国まで一年を切った二〇一三年半ば頃から、以前訪問した地を訪ねるときは、定点観測を心掛けるようにした。小稿では、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム、タイの五カ国において、二時点間で撮影した写真を対照することで、この地域の変貌振りの一部を紹介したい。

●進む貧困削減

プノンペンを初めて訪ねた二〇〇



●工場が建ち始めた工業団地
カンボジアやラオスで工業団地や経済特別区（SEZ）を建設する動きは、二〇〇〇年代後半から顕著になってきた。しかし、そのパンフレットは夢を抱かせる美しいイラストで飾られているものの、現場を訪れるとフェンスに覆われた荒地に一部の土地が造成されている程度で、工場立地が進んでいないのが実情であった。

その間、カンボジアの一人あたりGDPは二〇〇四年の四〇六ドルから一三年には一〇一七ドルにまで約二・五倍に膨らんでいる。

二〇一三年、筆者は同じ場所を訪れた。両写真右側のホテルは、まったく変わっていない。ところが、公園に敷き詰められたタイルや街頭は変わり、公園に関する限り別の場所となっていた。そして何より、複数の母親が子どもを遊ばせていたが、子どもは皆靴を履き、きれいな服を着ていた。

四年、トンレサップ川の河畔の公園を歩いていると、子どもたちが物乞いのため近づいて来た。金銭を渡したところで、そのお金は誰かに持っていられる。そう思うと、金銭は支払いたくなかった。ただ、冷たくあしらいたくもなく、子どもたちの写真を撮り、その写真をすぐにみせると、子どもたちは笑みをもらし、物乞いすることも忘れていた。ただ、写真でもわかるように、子どもたちは上半身裸と裸足で、ひとりの子どもはパンツすらも履いていない。





安全対策が進むタイ・バンコクの BTS スカイトレイン

上：2004 年 9 月 16 日

下：2014 年 3 月 3 日



摩天楼化するベトナム・ホーチミン市

右上：2007 年 11 月 13 日

右下：2014 年 10 月 19 日

二〇一〇年、ラオス・サワンナケート県のサワン・セノSEZ内のサワンパークを訪れた。同工業団地の設立が二〇〇八年二月、当時は粗く造成された土地にようやく一軒の工場が建設されているのみであった（前ページ右上）。ところが二〇一四年に訪ねると、前ページ左上の写真に示すように複数の工場が操業を始めており、その多くは外国企業である。

●活気付く国境貿易

ミャンマーとタイとの国境の町ミャウデイで国境貿易区の建設が決まったのは二〇〇六年一〇月。二〇〇九年に入り、この国境貿易区も稼働し始めた。しかし、筆者が現地を二〇一〇年二月に訪れると、その入り口は自動小銃を持った軍人が警備していた。軍政下で、しかも少数民族カレン族の反乱が治まらない地域であったためであろう。ただ、そのためか積替所を利用するトラックはほとんど見られなかった（前ページ右下）。

二〇一一年にテインセイン大統領が就任し民主化が進み、二〇一三年八月には外国人の越境も認められるようになった。筆者が二〇一三年一月に訪ねた際は、積替所には多数のトラックが停車していた（前ページ左下）。

●摩天楼化するメガシティ

冒頭でも述べたとおり、バンコクでは高層ビルの建設ラッシュが続いているが、ベトナムのホーチミン市でも状況は同じである。右上の写真は二〇〇六年にホーチミン市を訪れた際、サイゴン川ほとり

新興国にも波及する嗜好品消費：ラオス・ビエンチャン

右：2008年3月10日

下：2014年8月31日



いしだ まさみ／ アジア経済研究所 開発研究センター長

1993年アジア経済研究所入所。1997～2000年在ジャカルタ海外派遣(調査)員。
2009年7月から2014年3月まで、バンコク研究センター主任研究員。

のメリン広場から、ルネッサンス・リバーサイドホテル・サイゴン(左)とメリン・ポイント・タワー(右)を撮影したものである。ところが、二〇一四年に同じ地点から撮影すると、一番右手に地上一六五メートルで四四階建てのタイムズスクエア・ベトナムが、その中間に地上二六二メートル六八階建て、ホーチミン市で二番目の高さを誇るビテクスコ・フィナンシャル・タワーが建設されていた。さらに一番左手でも高層ビル建設が進められているが、

前年に筆者が訪ねたときと比べ、資金ショートのためか、建設はほとんど進んでいなかった。

●安全対策も進むスカイトレイン

最近日本の地下鉄などでも線路への転落や列車への接触を防ぐ「ホームドア」と呼ばれる安全対策が施されている。こうした安全対策は、バンコクのBTSスカイトレインでも進められている。前ページの左の写真はチョンノンシ駅で二〇一四年と一四年に撮影したものだが、ホームドアが駅のホームに備え付けられている。二〇一三年現在、タイの一人あたりGDPは六二三二ドル、バンコクの同地域総生産は一万九二五二ドル(二〇一一年)である。

●嗜好品消費の波及

バンコクでは、スカイトレインに直結したショッピング・モールなどで高級品を買う人も増えている。これまで所得水準の低い国からみてきたが、ここで再び一人あたりGDP一三九四ドルのラオスの首都ビエンチャンに戻ることにしたい。写真を見比べると、その間に資生堂の店舗が開業している。調べてみると、同社は二〇〇九年八月にラオスでの事業展開を開始している。嗜好品の消費意欲はラオスにも波及しているのである。

貧困の減少、外国投資による工業化、国境貿易の拡大、大都市での摩天楼化、高級品を求める消費意欲の波及。大メコン圏はいまや「メコン経済圏」として、変貌し続けている。